

原 遺 跡 2

— 治山ダム建設に伴う調査（原遺跡第20次）—

平成20(2008)年

太宰府市教育委員会

序

本書は、地域防災対策総合治山事業における治山ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

調査地は、太宰府天満宮の北西、四王寺山南東麓の谷部（特別史跡大野城跡内）に位置する大字太宰府にあり、平安時代から鎌倉時代を中心に隆盛を極めたとされる原山無量寺跡（原遺跡）の北端に位置します。

今回の調査で、この地域の第二次大戦後以降の生業の一端を知ることができる木炭窯跡を中心に調査を行いました。戦後という時代は、現在から見ると近いようですが、近いが故に埋蔵文化財調査においては除外される傾向が強く、また、戦後の生業を知る方々も少なくなっている時代でもあり、貴重な成果を得ることができました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心から願っております。

最後になりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました関係各位ならびに諸機関の方々のおかげであり、心からお礼申し上げます。

平成 20 年 12 月
太宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

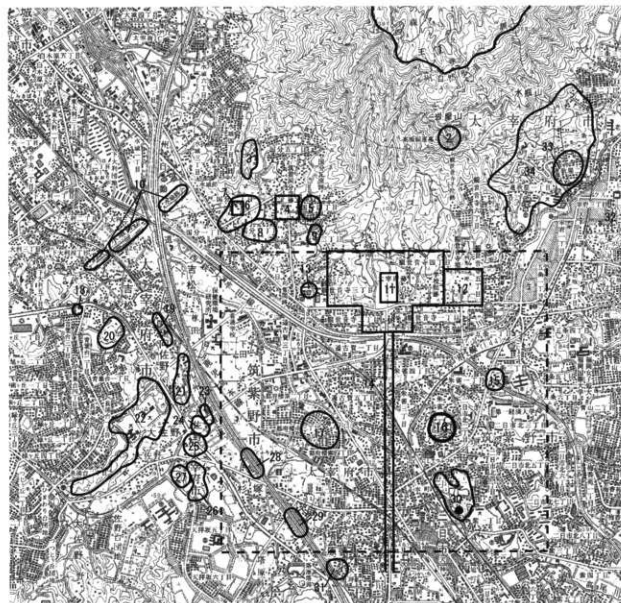
例言

1. 本書は太宰府市大字太宰府字普現 1462-1 で計画された地域防災対策総合治山事業における治山ダム建設に伴って実施した原遺跡第 20 次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測の基準点は、国土調査法第 II 座標系（日本測地系）を利用した。よって、本書に示される方位は特に注記のない限り G.N.（座標北）を指している。
3. 基準点測量は、隈理蔵文化財サポートシステムに委託した。また、調査地周辺地形測量図作成にあたってはご協力を賜った。記して感謝申し上げます。
4. 遺構の実測図作成は、下高大輔・久味木理恵が行い、遺構の写真撮影は下高が行った。
5. 遺物の実測図作成は福井円が行い、写真撮影は下高が行った。
6. 図の浄書は、遺構実測図を福井・下高、遺物実測図を福井が行った。
7. 出土した遺物およびすべての図面・写真等の記録は、太宰府市教育委員会が保管している。
8. 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお、遺構種別略号については、SD 溝、SK 土坑、SX 木炭窯がある。
SX 001
(遺構種別略号) (遺構番号)
9. 本書に用いる分類は以下の文献に記載されている。
土器…太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡 II』（太宰府市の文化財第 7 集）1983 年
10. 本書の執筆および編集は、下高が行った。

目次

1. 調査地の位置と歴史…………… 3
2. 調査に至る経緯と経過…………… 3
3. 調査体制…………… 4
4. 調査・整理方法…………… 4
5. 調査の概要…………… 6
 - (1) 調査前状況…………… 6
 - (2) 検出遺構…………… 6
 - (3) 出土遺物…………… 10
6. 総括…………… 11

写真版
報告書抄録



- | | | | |
|------------|-----------------|-----------|---------------------|
| 1. 大野城跡 | 10. 水城跡 | 19. 原口遺跡 | 28. 剣保遺跡 |
| 2. 岩屋城跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 20. 榑板遺跡 | 29. 唐人塚遺跡 |
| 3. 陣ノ尾遺跡 | 12. 観世音寺 | 21. 前田遺跡 | 30. 峯・峯畑遺跡 (●は軍火野聚) |
| 4. 筑前国分寺跡 | 13. 遠賀団田出土地 | 22. 宮ノ本遺跡 | 31. 桶田山遺跡 |
| 5. 法蓮跡 | 14. 大宰府条坊跡(破線内) | 23. 鎌川遺跡 | 32. 太宰府天満宮(安楽寺跡) |
| 6. 国分松本遺跡 | 15. 君塚遺跡 | 24. フケ遺跡 | 33. 浦城跡 |
| 7. 筑前国分尼寺跡 | 16. 般若寺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 34. 原遺跡(今回報告) |
| 8. 国分千足町遺跡 | 17. 市ノ上遺跡 | 26. 福道遺跡 | |
| 9. 御笠団田出土地 | 18. 神ノ前高跡 | 27. 殿城戸遺跡 | |

図 1 太宰府市とその周辺の遺跡 (1/30,000)



原20-原道跡第20次調査		原10-原道跡第10次調査		原5-原道跡第5次調査		原3-原道跡第3次調査		原1-原道跡第1次調査	
調査年度	調査区画	調査年度	調査区画	調査年度	調査区画	調査年度	調査区画	調査年度	調査区画
第1次調査	大字太宰府字原1597-1, 1551-4, 1551-5	昭和55年度	原道跡第10次調査	昭和62年度	原道跡第5次調査	昭和68年度	原道跡第3次調査	昭和72年度	原道跡第1次調査
第2次調査	大字太宰府字原1597-1外	平成2年度	原道跡第10次調査	昭和62年度	原道跡第5次調査	昭和68年度	原道跡第3次調査	昭和72年度	原道跡第1次調査
第3次調査	大字太宰府字原1551-4, 1551-5	昭和65年度	原道跡第10次調査	昭和62年度	原道跡第5次調査	昭和68年度	原道跡第3次調査	昭和72年度	原道跡第1次調査
第4次調査	大字太宰府字原1561-1	昭和68年度	原道跡第10次調査	昭和62年度	原道跡第5次調査	昭和68年度	原道跡第3次調査	昭和72年度	原道跡第1次調査
第5次調査	大字太宰府字原1562-1	昭和68年度	原道跡第10次調査	昭和62年度	原道跡第5次調査	昭和68年度	原道跡第3次調査	昭和72年度	原道跡第1次調査
第6次調査	大字太宰府字原1597-1	昭和68年度	原道跡第10次調査	昭和62年度	原道跡第5次調査	昭和68年度	原道跡第3次調査	昭和72年度	原道跡第1次調査
第7次調査	大字太宰府字原1553-2	平成3年度	原道跡第10次調査	昭和62年度	原道跡第5次調査	昭和68年度	原道跡第3次調査	昭和72年度	原道跡第1次調査
第8次調査	大字太宰府字原1553-2	平成3年度	原道跡第10次調査	昭和62年度	原道跡第5次調査	昭和68年度	原道跡第3次調査	昭和72年度	原道跡第1次調査
第9次調査	三條1丁目1550	平成3年度	原道跡第10次調査	昭和62年度	原道跡第5次調査	昭和68年度	原道跡第3次調査	昭和72年度	原道跡第1次調査
第10次調査	三條1丁目1559-1	平成4年度	原道跡第10次調査	昭和62年度	原道跡第5次調査	昭和68年度	原道跡第3次調査	昭和72年度	原道跡第1次調査
第11次調査	三條1丁目1552-4	平成5年度	原道跡第10次調査	昭和62年度	原道跡第5次調査	昭和68年度	原道跡第3次調査	昭和72年度	原道跡第1次調査
第12次調査	三條1丁目1563-1外	平成5年度	原道跡第10次調査	昭和62年度	原道跡第5次調査	昭和68年度	原道跡第3次調査	昭和72年度	原道跡第1次調査
第13次調査	三條1丁目1569-11, 1563-3	平成7年度	原道跡第10次調査	昭和62年度	原道跡第5次調査	昭和68年度	原道跡第3次調査	昭和72年度	原道跡第1次調査

図2 原道跡の既往の調査 (1/5,000)

1. 調査地の位置と歴史

太宰府市は、北から東にかけて三郡山系、西から南にかけては背振山系に囲まれ、南東側に筑後平野、北西側に福岡平野が展開しており、両平野の連結地点に位置している。古代においては太宰府政庁を中心に太宰府条坊と呼ばれる古代都市が展開しており、中世以降は安楽寺(太宰府天満宮)を中心に門前町が展開して今日に至っている(図1、太宰府市2004a・2004b・2005)。

今回報告する原道跡は、三郡山系を構成する山の一つである四王寺山(特別史跡大野城跡)の南東麓の台地丘陵上に展開する。この丘陵南側は昭和48年に浦ノ城団地として宅地造成されており(財団法人太宰府市文化スポーツ振興財団2002)、北側の山裾にかけて徐々に開発が及んでいるのが現状である。

原道跡は、その名称を小字「原」から付けられたものである。当地は平安時代から南北朝時代にかけて、「原山無量寺」という天台宗寺院が存在した。また、華台坊・六度寺・安祥寺・十境坊・真寂坊・宝寿坊・寂門坊・明星坊の八つの僧坊があったことから「原八坊」とも称される。寺域や僧坊の配置については「原山無量寺古図」(年代不詳、個人蔵)から想定できる(太宰府市1992・2004a)。

平成20年11月現在、想定される寺域内は、宅地造成や砂防・治山ダム建設に伴って21回にわたる発掘調査が行われている(図2)。これらの調査成果により、9世紀から14世紀代の遺構・遺物が多数確認されている(太宰府町教育委員会1981、太宰府市1992・2004a、太宰府市教育委員会2001a)。

今回報告する原道跡第20次調査地は、想定される寺域の北端が北隣接地に当たる場所であり、原道跡内における既往の調査地からやや離れた場所にある(図2)。四王寺山南東麓の森林内であり、特別史跡大野城跡の境界線にあたる。調査地から東に下りると昭和46年に宅地造成された三条台団地があるが、近接する場所における埋蔵文化財調査は行われていない。

2. 調査に至る経緯と経過

太宰府市大字太宰府字普現1462-1・1462-2において、福岡県農林事務所森林土木課による地域防災対策総合治山事業において治山ダム建設が計画された(図3)。これに伴って、治山ダム本体が建設される場所を中心に踏査した結果、四王寺山山頂付近から東にむけて派生する沢を挟んで南側において三段にわたる人工造成を確認、北側においては近世以降と考えられる木炭炭跡と新田の山道を確認した(図3)。この踏査結果を基に開発者側と協議した結果、木炭炭跡のある沢の北側については、治山ダム本体が建設される範囲を記録保存を目的とした本調査を実施し、沢の南側の三段の人工造成については、最上段が治山ダム本体の範囲に当たる場所であったために、この場所に沢に対して平行の確認トレンチを人力で設置して、基本層序と遺構の有無確認を行った。その結果、腐葉土を中心とした表土層の下層において地山を確認したのみで、遺構・遺物は確認できなかった。そのため、沢の南側に関しては本調査を実施しないものと決定したが、当地が特別史跡大野城跡内に当たることもあり、工事中においても立会調査を行う旨が決定された。さらに、治山ダム本体が建設される場所まで工事用仮設道を設置する申請が出された(図3)。この工事内容は、地形の一部を削削するが、基本的には現表土の上に真砂土を敷く工法で、治山ダム建設が完了した時点で、すべて撤去して元の地形に復すというものである。そのため、本体建設に伴う立会調査とともに、仮設道設置・撤去時においても立会調査を実施することとなった。

本調査は平成20年7月22日から同年8月13日まで行い、開発対象面積は732㎡、その内の調査対象面積は72㎡である。調査は下高木が担当した。なお、本調査期間内に仮設道設置箇所の一部においての草刈作業も含まれている。

3. 調査体制

調査体制は以下の通りである。

平成 20 / 2008 年度・・・発掘調査及び整理・報告書作成

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	松田幸夫
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	菊武良一
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	吉原慎一・齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利・山村信榮・中島恒次郎
	技術主査	井上信正
	主任技師	高橋 学・宮崎亮一
	技師（嘱託）	柳 智子・大塚正樹
		下高大輔（調査・整理・報告書作成担当）

4. 調査・整理方法

原遺跡第 20 次調査は、①発掘調査、②その周辺を対象に行った詳細地形測量調査（1/100 縮尺の等高線図の作成、発掘調査における実測に用いる測量基準点の設置も含む）、③仮設道設置を視野に入れた広範囲にわたる地形把握調査の三種類実施した。これらは発掘調査期間中において並行して実施した。それ故、発掘調査における遺構実測の際に用いる基準杭は、3 m 間隔でグリッド状に任意で設置して、後で座標を付与した。また、遺構検出前から木炭窯の凡その形状は把握できていたために、3 m グリッドの設置は窯の横断面・縦断面に合わせて設置した。以上の点以外は、太宰府市で実施している調査・整理方法と同様の方法で行っている（太宰府市教育委員会 1989・2001b）。

また、広範囲にわたる地形把握調査は、本来ならば発掘調査地周辺を対象に行った詳細地形測量調査を実施するのが妥当と考えるが、予算上不可能であった。よって、今回行った調査方法は、踏査によって人工造成地形を確認した後に、方位磁石（コンパス）とライカジオシステムズ社製の DISTO classic5 ハンディ型レーザー距離計（いわゆる簡易光波距離計）を用いて、千分の一の縮尺地形図（今回は「大宰府史跡平面図 1/1,000」を使用）上に計測した人工造成地形を図化したものである²¹（図 3）。なお、図 3 の範囲内には個人所有の土地も含まれていることや調査期間の制約上、確実に公有地と判断できる場所から距離計のレーザーが届く範囲でのみ計測して図化している。今後、さらなる詳細な調査が期待される。

【註】

- 1) このような方法は城郭研究において実施されており、その詳細については、高田徹「縄張り図の描き方 自分なりの見方を図にこめよう」『城を歩く【その調べ方・楽しみ方】』（新人物往来社、2003 年）を参照されたい。

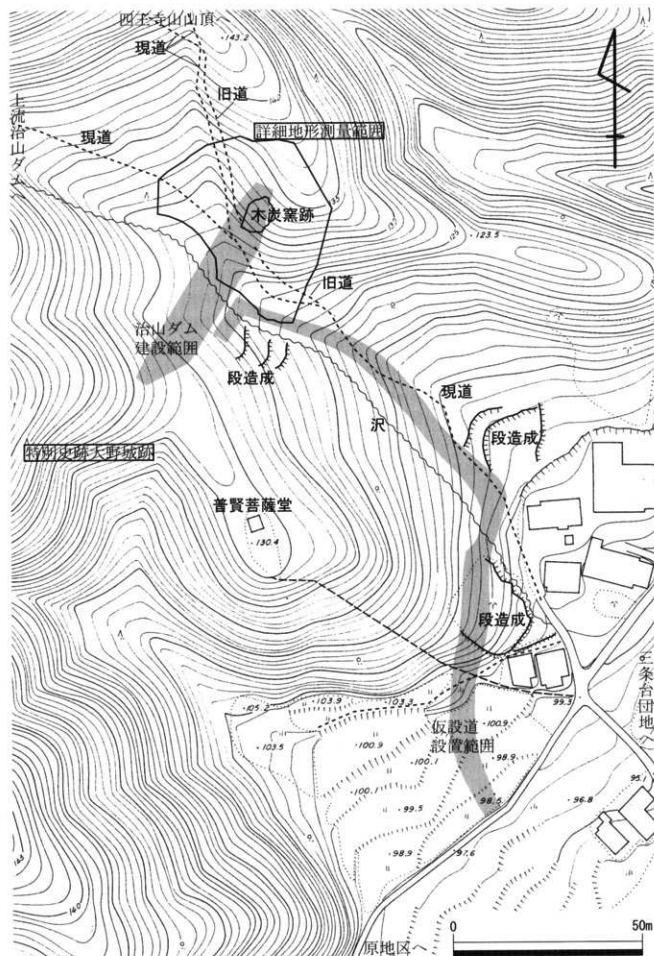


図 3 調査前状況概要図（1/1,000）【点線は山道・山道跡】

5. 調査の概要

(1) 調査前状況 (図3-4、写真図版1-1)

本調査地における調査前状況は、地表面から木炭窯跡が把握できる状況であった。窯体が掘り込まれていた斜面の一部が抉れて崩落していたが、その全体にあまり厚くない腐葉土が覆っているのみの状況であった。その形状から焼成部 (炭化室)・焚口・燃焼部 (点火室)・前庭部といった具合に把握できた。また、焼成部 (炭化室) と焚口・燃焼部 (点火室) とを両する石積みも良好に残存していた。これらのことから木炭窯の廃絶時期は近・現代の可能性が高いと想定した。

また、木炭窯跡の南西には三条台団地方面から四王寺山山頂方面へと続く山道と上流治山ダムへと至る山道とが分岐する場所がある。分岐点から上流治山ダムへの山道はその規模と腐葉土の体積状況から治山ダム建設に伴って新設されたか元の山道を拡張した可能性が極めて高い。分岐点から四王寺山山頂へ至る山道は一人が通れる掘り込み状の通路であり、上流治山ダムへの山道に比べると腐葉土の体積状況が厚かった。また、三条台団地方面から四王寺山山頂に至る山道の東側に平行して一人が通れる規模の掘り込み状の通路が確認できた。これは先述の木炭窯跡の前庭部によって切られていることが地形から確認できた。このことから木炭窯が構築される以前の山道であった可能性がある。木炭窯が構築された以後は、先述の三条台団地方面から木炭窯南西の分岐点を通って四王寺山山頂へと至る通路が使用されていたものと考えられる。なお、木炭窯跡周辺で確認した段造成は地籍図から検討した結果、個人所有の土地にしか存在しないという傾向があることがわかった。このことから、これらの段造成は個人による耕作地などの土地利用の結果、造成された可能性が指摘できる。

(2) 検出遺構 (図4～6、写真図版1～11・13)

上記のような調査前状況から、記録保存を目的とした木炭窯跡の所在する調査区をSX001、木炭窯跡とその周囲の新旧通路の関係の確認を得ることを目的として、SX001の南北にそれぞれ南トレンチ・北トレンチを設けた。

①南トレンチ

南トレンチは、木炭窯によって切られた旧道の最上部に1×3mの規模で設置した。15～20cm程度の腐葉土による表土層を除去すると、地山に到達した。地山においても地表面で確認できた掘り込みが確認できた。表土層からは古く想定しても江戸時代後期以降の遺物が出土した。

②北トレンチ

北トレンチは、新旧通路にわたって1×8mの規模で設置した。南トレンチと同様の所見であった。遺物は出土しなかった。

③SX001 木炭窯跡

四王寺山山頂から派生する尾根の南斜面に掘り込まれて構築された木炭窯跡である。以下において、焚口・燃焼部 (点火室)・焼成部 (炭化室)・排煙部、前庭部の順に詳述する。

焚口・燃焼部 (点火室) 焼成部との境である最奥部は約0.8m、人頭大の石が四段にわたって積まれている。最終操業時は焼成部よりも0.2m弱高かった。これは、燃焼部の縦断割りによる土層観察から旧操業時の灰が堆積したためと考えられる。灰の堆積層と考えられる層が二層確認できることから少なくとも二回の操業が行われた窯であったと考えられる。

焼成部 (炭化室) と排煙部 2.2×2.8mの規模でやや長方形に近い形状の円を呈している。燃焼部との境は約0.8mで、その周囲に人頭大からそれ以下の大きさの石が高さ1.1m程度積まれている。底部は全

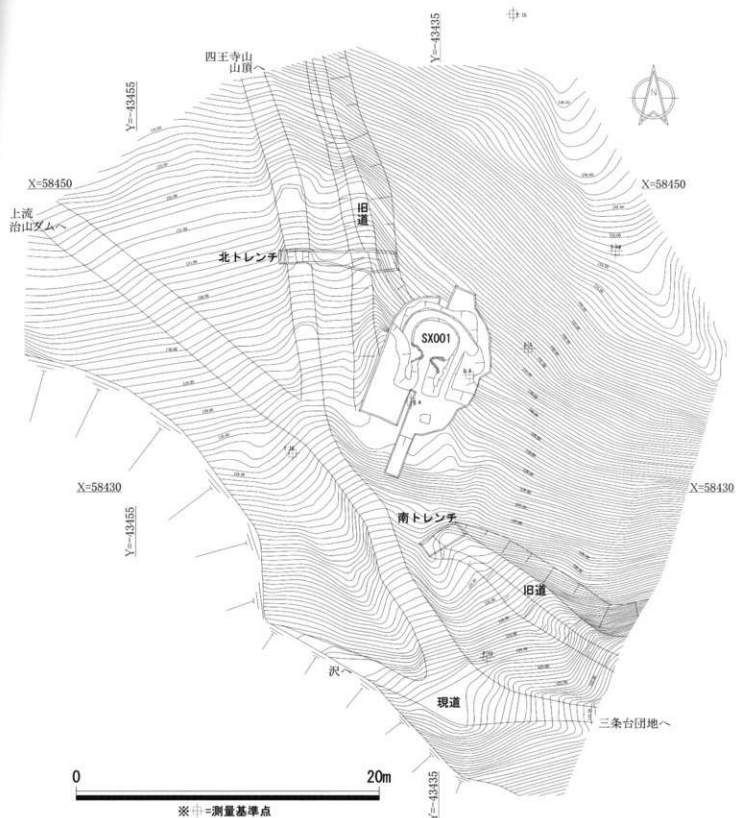


図4 調査地位置及び周辺地形測量図 (1/250)

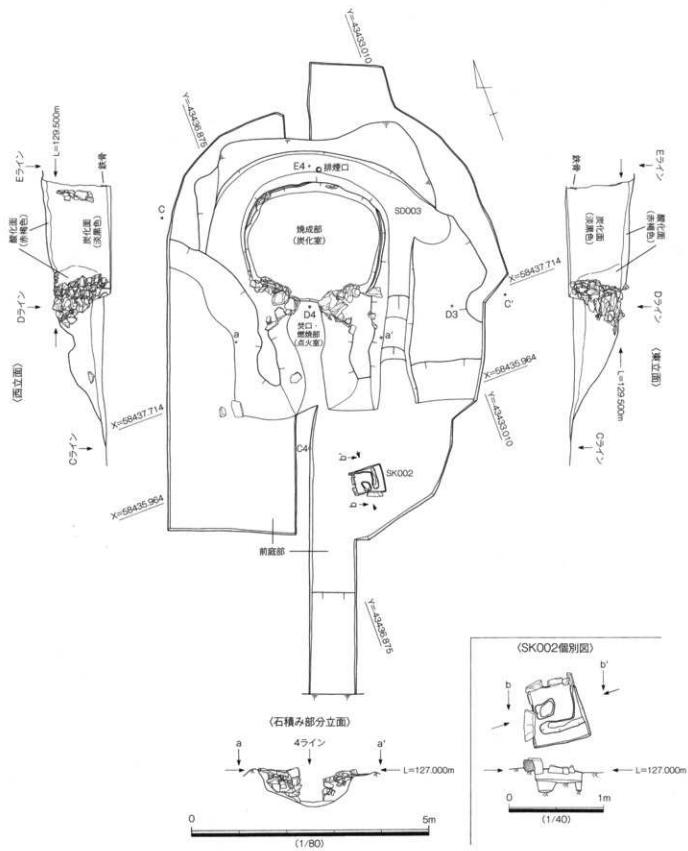
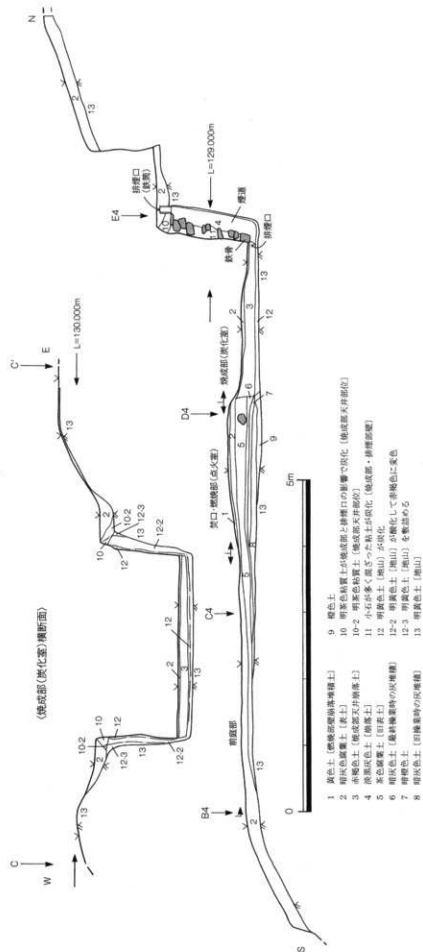


図5 SX001木炭窯最終操業時遺構図〔図6に対応〕



- 1 灰色土 (前期築造時使用土)
- 2 赤褐色土 (前期築造時使用土)
- 3 赤褐色土 (前期築造時使用土)
- 4 赤褐色土 (前期築造時使用土)
- 5 赤褐色土 (前期築造時使用土)
- 6 赤褐色土 (前期築造時使用土)
- 7 赤褐色土 (前期築造時使用土)
- 8 赤褐色土 (前期築造時使用土)
- 9 褐色土 (前期築造時使用土)
- 10-2 褐色土 (前期築造時使用土)
- 11 小石部多く混入した粘土 (前期築造時使用土)
- 12 明褐色土 (前期築造時使用土)
- 12-2 明褐色土 (前期築造時使用土)
- 13 明褐色土 (前期築造時使用土)

図6 SX001木炭窯跡土層図〔図5に対応〕

面が淡黒色を呈しており炭化している。東西壁面は燃焼部との境から0.5m程度赤褐色を呈しており炭化している。そこから奥にかけては淡黒色を呈しており炭化している。最奥部の壁面は小石が張り付けられたように積まれており、焼成部最奥部下に開いている排煙部の煙道の壁面を構築する際に粘土に貼り付けながら積まれたものと考えられる。焼成部に開いた排煙口の上部を支えるのは0.15×0.15mの鉄骨である。排煙口の規模は高さ0.1m弱、幅0.2m弱の長方形を呈しており、焼成部底部よりやや掘り込まれた形で設置されていた。この規模で煙道がやや北側に傾いた角度で構築され、高さ1.2mのところ、直径約0.1m・高さ0.2mの大きさの鉄骨によって構成された排煙口に達する。排煙口を含めた焼成部の周りには深さ約0.15m・幅約0.7mで掘り込みがあり、焼成部に水が入れないようにするための排水溝と考えられる(SD003)。また、排水溝の窓体側掘り込み傾斜は約30°を測り、その角度でドーム型の屋根が焼成部を覆っていたと考えられる。屋根部材はおそらく木の枝などによって骨組みを作って藁などの繊維物を被せて粘土を貼ったものと考えられる。これは、焼成部の底部に堆積していた赤褐色の土の上に人頭大の大きさの同色の粘土の塊が複数確認できたことによる。この塊を観察すると繊維物の痕跡を一定の面にのみ確認することができる。

前庭部 約4×7mの規模で長方形を呈しており、南側は斜面になっている。先述の通り、旧道を切る形で展開している。SX001調査区の南東隅に大木があったために旧道との関係を探るための調査区を設定できなかった。しかし、南トレンチの北西側の地形の状態から旧道を切って前庭部が構築された可能性は極めて高い。なお、表土である暗灰色腐葉土から複数のスレートが、旧表土である茶色腐葉土直上から最近では目にする事ができなくなった形状の鉄製の鉄製品などが出土した。また、燃焼部に向かって右手に0.7×0.7mの正方形を呈して、平均深さ0.15m、最深0.25mの石組み土坑を検出した(SX002)。埋土が前庭部全面を覆っていた表土である暗灰色腐葉土に酷似していたことと、焼成部の左手などには検出されなかったことを鑑みると、木炭窯が廃絶した後の構築物の可能性もある。なお、遺物は出土していない。

(3) 出土遺物(図7)、写真図版13-32)

SX001表土層出土遺物

須恵器

坏(1) 内外面ともに回転ナデ調整。色調は内外面ともに淡灰色を呈する。胎土は緻密で硬質。

土師器

皿a×坏a(2) 内面は回転ナデ、外面は回転ヘラ切りの後にナデ調整。色調は内外面ともに鈍い橙色を呈する。

南トレンチ出土遺物

国産陶器

土瓶(3) 欠損部分が多く、残存部分から復元的に作図。外面に透明な釉が薄く施されている。体部下半部は煤が付着している。色調は外面が白橙色、内面が淡茶灰色を呈する。胎土は緻密で硬質。

国産磁器

盃(4) 完成品。光沢度・透明度が高い釉が高台以外に施されている。素地は白色。胎土は緻密で硬質。



図7 原遺跡第20次調査 出土遺物実測図(1/3)

6. 総括

① SX001 木炭窯跡について

地表面においてある程度把握できていた木炭窯跡であるが、今回の発掘調査によって、細部に至るまで良好な形で残存していたことがわかった。

排煙部の鉄骨と鉄筒の部材は、木炭窯のある程度の年代観を与える材料と考えられる。当調査区の表土層出土の鉄製の鉄製品や木炭窯跡の地表面への露呈具合などを勘案すると戦後と考えるのが妥当と考えられる。

今回の調査時に周辺住民の方々への聞き取り調査を行わなかったために、埋蔵文化財調査成果からの想定外の域を出ないのは、調査担当者の落度であり反省するところである。また、木炭窯跡の検出事例は、各地で様々な時期の事例が蓄積されつつあり、比較検討を行うことも今後の課題といえる。

木炭窯は生活燃料などの木炭を生産する窯である。木炭は古くから我が国の生業に取り入れられており(樋口1993)、木炭生成の木炭窯を調査・研究・保存(記録保存も含む)して未来へ伝えることは我が国の生業の一端を未来に伝播することに繋がると考える。

② 通路について

地表面観察による地形の把握と発掘調査成果は一致する結果であった。このことにより、当地域においては人が山に入るという行為によって作られた通路(山道)以外の大規模な人為的改変は、個人所有の土地内における耕作などによる施設行為を除いては見られないことが確認できた³¹⁾。通路は新旧あることが確認でき、旧道の断絶と新道(現道)の利用には木炭窯設置が関わっている可能性が極めて高い。このことは、当地域における山の利用が変化したことを示唆しており、生業の一端を窺い知ることができる貴重な成果を得ることができた。今後は、今回の調査区から四王寺山山頂に至るまでの通路の詳細把握とその周辺の人為造成の有無を確認することが文化財保護の一端として急務といえる。

【註】

1) ただし、近年に建設された本調査地の土流に所在する治山ダムおよびその建設作業用通路は存在する。これについては6頁の調査前状況の説明を参照されたい。

【引用文献】

- 財団法人太宰府市文化スポーツ振興財団 2002 『宅地開発と人口増加』『太宰府一人と自然の風景』
 太宰府市 1992 『太宰府市史 考古資料編』
 太宰府市 2004a 『太宰府市史 通史編Ⅱ』
 太宰府市 2004b 『太宰府市史 通史編Ⅲ』
 太宰府市 2005 『太宰府市史 通史編Ⅰ』
 太宰府市教育委員会 1981 『原遺跡の調査』『筑前国分寺跡・陣ノ尾遺跡』(太宰府市の文化財第4集)
 太宰府市教育委員会 1989 『調査方法』『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅰ』(太宰府市の文化財第14集)
 太宰府市教育委員会 2001a 『原遺跡Ⅰ—第8・11次調査—』(太宰府市の文化財第54集)
 太宰府市教育委員会 2001b 『太宰府市における埋蔵文化財調査指針(2001年9月改訂)』
 福岡県教育委員会 2008 『原遺跡18次』(福岡県文化財調査報告書第219集)
 樋口清之 1993 『木炭』法政大学出版会

表1 原遺跡第20次調査 検出遺構一覧

S-番号	遺構番号	種別	備考	埋土状況(古→新)	遺構間切合(古→新)	時期	地区番号
1	SX001	木炭窯				昭和中期	—
2	SK002	土坑	SX001 前底部内			昭和中期	SX001 内
3	SD003	溝	SX001 窯体周囲			昭和中期	SX001 内

表2 原遺跡第20次調査 出土遺物一覧

SX001 表土

須 恵 器	椀
土 師 器	皿 a × 坏 a
木 製 品	木炭
金 属 製 品	鉄製品 (鉄・鋤簾・斧)

南トレンチ 表土

土 師 器	破片
国 産 陶 器	土瓶
国 産 磁 器	盃 (染付)

写真図版



1. SX001 調査前状況 (南から)



2. SX001 廃絶時 検出状況 (南から)



3. SX001 廃絶時 焚口・燃焼部 検出状況 (南から)



4. SX001 鹿絶時 窯体内 天井崩落状況（西から）



5. SX001 鹿絶時 窯体内 天井崩落状況（東から）



6. SX001 廃絶時 前庭部 検出状況（西から）



7. SX001 前庭部南斜面 検出状況（北から）



8. SX001 前庭部南斜面 検出状況（南から）



9. SK002 土層観察（北から）



10. SK002 完掘状況（北から）



11. SX001 最終操作時 検出状況（北東から）



12. SX001 最終操作時 検出状況（南から）



13. SX001 燃烧部 石積み状況 (南から)



14. SX001 焚口・燃烧部付近 石積み状況 (北から)



15. SX001 焚口・燃烧部対面 壁面状況 (南から)



16. SX001 上部斜面 土層観察 (南東から)



17. SX001 窯体東側 横断面土層観察 (南から)

(北西から)



18. SX001 窯体内 断ち割り状況 (北から)



19. SX001 窯体東壁 横断面土層観察 (南西から)



20. SX001 窯体西壁 横断面土層観察 (南東から)

21. SX001
排煙部
断ち割り状況
(南東から)



22. SX001
排煙部部材
鉄骨出土状況
(南上から)



23. SX001
排煙口近景
(北東から)





24. SX001 燃焼部 縦断断ち割り土層観察（南東から）



25. SX001 前庭部 縦断面土層観察（南東から）



26. 南トレンチ完掘状況（北から）



27. 北トレンチ完掘状況（西から）



28. 本堤左岸（本調査地）
着工範囲
伐採後状況
（南から）



29. 本堤右岸
着工範囲
伐採後状況
（北から）



30. 本堤右岸
工事状況
（北から）



31. SX001 天井部残骸

SX001表土層出土



南トレンチ出土



32. 原遺跡 第20次調査 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はらいせき 2										
書名	原遺跡 2										
副書名	治山ダム建設に伴う調査 (原遺跡第 20 次)										
シリーズ名	太宰府市の文化財										
シリーズ番号	109 集										
編著者	下高 大輔										
編集機関	太宰府市教育委員会										
所在地	福岡県太宰府市観世音寺 1 丁目 1 番 1 号										
発行年月日	2008 (平成 20) 年 12 月 8 日										
ふりがな	条坊	ふりがな	コード		座標 (国土座標第 2 系)		調査期間		調査面積	調査原因	
所収遺跡名	【嶺山種実案】	所在地	市町村	通称番号	X	Y	開始	終了	m ²		
はらいせき だい 20 じ		太宰府市大字 太宰府市観世音寺 太宰府市首領									
原遺跡 第 20 次	条坊外	1462-1	402214	302-020	58440	-43435	20080722	20080813	72	治山ダム建設	
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項				
原遺跡 第 20 次	生産関連遺跡	近・現代	木炭窯・遺跡		土器・陶磁器・木製品(木炭)・金属製品						

太宰府市の文化財 第 109 集

原遺跡 2

— 治山ダム建設に伴う調査 (原遺跡第 20 次) —

平成20(2008)年12月

編集・発行 太宰府市教育委員会
太宰府市観世音寺 1-1-1

印刷 有限会社 システム・レコ
福岡市東区土井 1-11-21

原 遺 跡 2

— 治山ダム建設に伴う調査（原遺跡第20次）—

平成20(2008)年

太宰府市教育委員会

序

本書は、地域防災対策総合治山事業における治山ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

調査地は、太宰府天満宮の北西、四王寺山南東麓の谷部（特別史跡大野城跡内）に位置する大字太宰府にあり、平安時代から鎌倉時代を中心に隆盛を極めたとされる原山無量寺跡（原遺跡）の北端に位置します。

今回の調査で、この地域の第二次大戦後以降の生業の一端を知ることができる木炭窯跡を中心に調査を行いました。戦後という時代は、現在から見ると近いようですが、近いが故に埋蔵文化財調査においては除外される傾向が強く、また、戦後の生業を知る方々も少なくなっている時代でもあり、貴重な成果を得ることができました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心から願っております。

最後になりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました関係各位ならびに諸機関の方々のおかげであり、心からお礼申し上げます。

平成 20 年 12 月
太宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

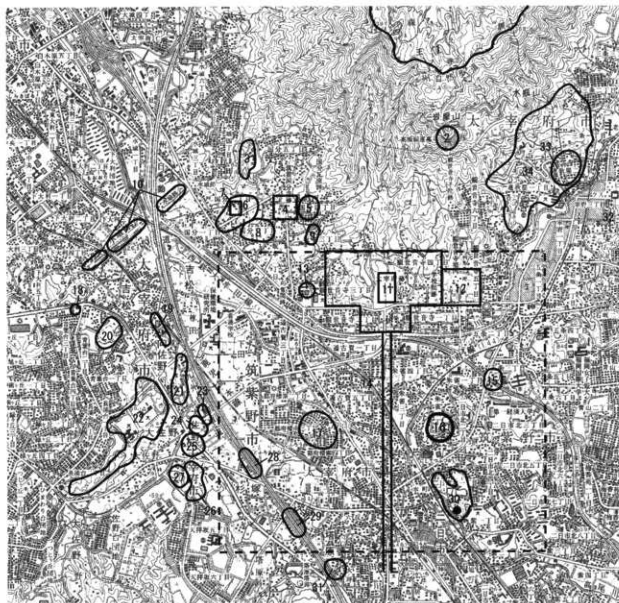
例言

1. 本書は太宰府市大字太宰府字普現 1462-1 で計画された地域防災対策総合治山事業における治山ダム建設に伴って実施した原遺跡第 20 次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測の基準点は、国土調査法第 II 座標系（日本測地系）を利用した。よって、本書に示される方位は特に注記のない限り G.N.（座標北）を指している。
3. 基準点測量は、隈理蔵文化財サポートシステムに委託した。また、調査地周辺地形測量図作成にあたってはご協力を賜った。記して感謝申し上げます。
4. 遺構の実測図作成は、下高大輔・久味木理恵が行い、遺構の写真撮影は下高が行った。
5. 遺物の実測図作成は福井円が行い、写真撮影は下高が行った。
6. 図の浄書は、遺構実測図を福井・下高、遺物実測図を福井が行った。
7. 出土した遺物およびすべての図面・写真等の記録は、太宰府市教育委員会が保管している。
8. 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお、遺構種別略号については、SD 溝、SK 土坑、SX 木炭窯がある。
SX 001
(遺構種別略号) (遺構番号)
9. 本書に用いる分類は以下の文献に記載されている。
土器…太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡 II』（太宰府市の文化財第 7 集）1983 年
10. 本書の執筆および編集は、下高が行った。

目次

1. 調査地の位置と歴史…………… 3
2. 調査に至る経緯と経過…………… 3
3. 調査体制…………… 4
4. 調査・整理方法…………… 4
5. 調査の概要…………… 6
 - (1) 調査前状況…………… 6
 - (2) 検出遺構…………… 6
 - (3) 出土遺物…………… 10
6. 総括…………… 11

写真版
報告書抄録



- | | | | |
|------------|-----------------|-----------|---------------------|
| 1. 大野城跡 | 10. 水城跡 | 19. 煎口遺跡 | 28. 剣保遺跡 |
| 2. 岩屋城跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 20. 榎板遺跡 | 29. 唐人塚遺跡 |
| 3. 陣ノ尾遺跡 | 12. 観世音寺 | 21. 前田遺跡 | 30. 峯・峯畑遺跡 (●は軍火野原) |
| 4. 筑前国分寺跡 | 13. 遠賀団田出土地 | 22. 宮ノ本遺跡 | 31. 桶田山遺跡 |
| 5. 法遺跡 | 14. 大宰府条坊跡(破線内) | 23. 鎌川遺跡 | 32. 太宰府天満宮(安楽寺跡) |
| 6. 国分松木遺跡 | 15. 君塚遺跡 | 24. フケ遺跡 | 33. 浦城跡 |
| 7. 筑前国分尼寺跡 | 16. 般若寺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 34. 原遺跡(今回報告) |
| 8. 国分千足町遺跡 | 17. 市ノ上遺跡 | 26. 福道遺跡 | |
| 9. 御笠団田出土地 | 18. 神ノ前高跡 | 27. 殿城戸遺跡 | |

図 1 太宰府市とその周辺の遺跡 (1/30,000)

3. 調査体制

調査体制は以下の通りである。

平成 20 / 2008 年度・・・発掘調査及び整理・報告書作成

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	松田幸夫
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	菊武良一
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	吉原慎一・齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利・山村信榮・中島恒次郎
	技術主査	井上信正
	主任技師	高橋 学・宮崎亮一
	技師（嘱託）	柳 智子・大塚正樹
		下高大輔（調査・整理・報告書作成担当）

4. 調査・整理方法

原遺跡第20次調査は、①発掘調査、②その周辺を対象に行った詳細地形測量調査（1/100縮尺の等高線図の作成、発掘調査における実測に用いる測量基準点の設置も含む）、③仮設道設置を視野に入れた広範囲にわたる地形把握調査の三種類実施した。これらは発掘調査期間中において並行して実施した。それ故、発掘調査における遺構実測の際に用いる基準杭は、3m間隔でグリッド状に任意で設置して、後で座標を付与した。また、遺構検出前から木炭窯の凡その形状は把握できていたために、3mグリッドの設置は窯の横断面・縦断面に合わせて設置した。以上の点以外は、太宰府市で実施している調査・整理方法と同様の方法で行っている（太宰府市教育委員会1989・2001b）。

また、広範囲にわたる地形把握調査は、本来ならば発掘調査地周辺を対象に行った詳細地形測量調査を実施するのが妥当と考えるが、予算上不可能であった。よって、今回行った調査方法は、踏査によって人工造成地形を確認した後に、方位磁石（コンパス）とライカジオシステムズ社製の DISTO classic5 ハンディ型レーザー距離計（いわゆる簡易光波距離計）を用いて、千分の一の縮尺地形図（今回は「大宰府史跡平面図 1/1,000」を使用）上に計測した人工造成地形を固化したものである²¹（図3）。なお、図3の範囲内には個人所有の土地も含まれていることや調査期間の制約上、確実に公有地と判断できる場所から距離計のレーザーが届く範囲でのみ計測して固化している。今後、さらなる詳細な調査が期待される。

【註】

- 1) このような方法は城郭研究において実施されており、その詳細については、高田徹「縄張り図の描き方 自分なりの見方を図にこめよう」『城を歩く【その調べ方・楽しみ方】（新人物往来社、2003年）を参照されたい。

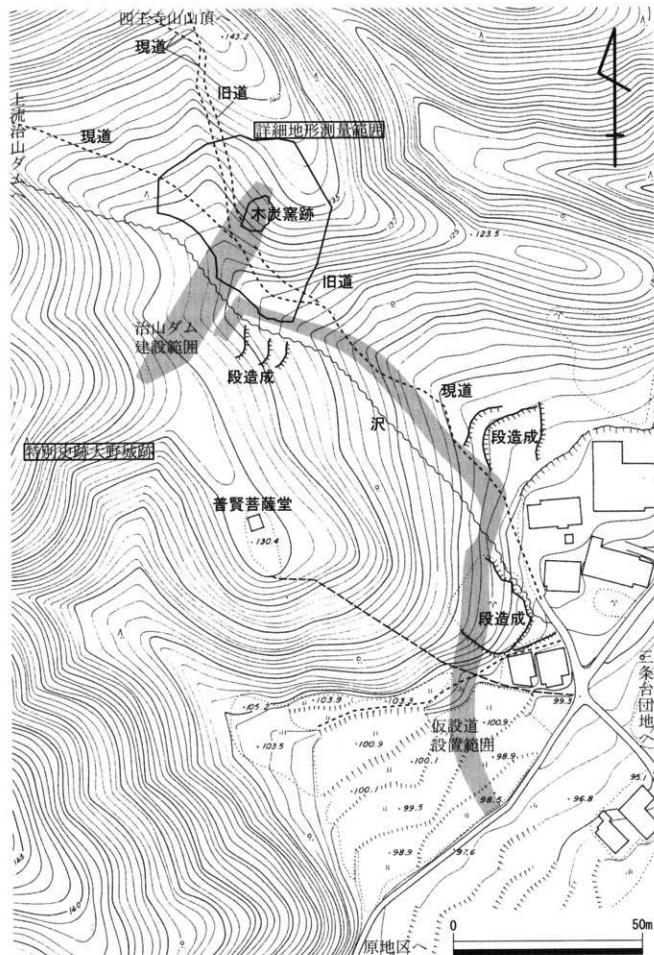


図3 調査前状況概要図（1/1,000）【点線は山道・山道跡】

5. 調査の概要

(1) 調査前状況 (図3-4、写真図版1-1)

本調査地における調査前状況は、地表面から木炭窯跡が把握できる状況であった。窯体が掘り込まれていた斜面の一部が抉れて崩落していたが、その全体にあまり厚くない腐葉土が覆っているのみの状況であった。その形状から焼成部 (炭化室)・焚口・燃焼部 (点火室)・前庭部といった具合に把握できた。また、焼成部 (炭化室) と焚口・燃焼部 (点火室) とを両する石積みも良好に残存していた。これらのことから木炭窯の廃絶時期は近・現代の可能性が高いと想定した。

また、木炭窯跡の南西には三条台団地方面から四王寺山山頂方面へと続く山道と上流治山ダムへと至る山道とが分岐する場所がある。分岐点から上流治山ダムへの山道はその規模と腐葉土の体積状況から治山ダム建設に伴って新設されたか元の山道を拡張した可能性が極めて高い。分岐点から四王寺山山頂へ至る山道は一人が通れる掘り込み状の通路であり、上流治山ダムへの山道に比べると腐葉土の体積状況が厚かった。また、三条台団地方面から四王寺山山頂に至る山道の東側に平行して一人が通れる規模の掘り込み状の通路が確認できた。これは先述の木炭窯跡の前庭部によって切られていることが地形から確認できた。このことから木炭窯が構築される以前の山道であった可能性がある。木炭窯が構築された以後は、先述の三条台団地方面から木炭窯南西の分岐点を通って四王寺山山頂へと至る通路が使用されていたものと考えられる。なお、木炭窯跡周辺で確認した段造成は地籍図から検討した結果、個人所有の土地にしか存在しないという傾向があることがわかった。このことから、これらの段造成は個人による耕作地などの土地利用の結果、造成された可能性が指摘できる。

(2) 検出遺構 (図4～6、写真図版1～11・13)

上記のような調査前状況から、記録保存を目的とした木炭窯跡の所在する調査区をSX001、木炭窯跡とその周囲の新旧通路の関係の確認を得ることを目的として、SX001の南北にそれぞれ南トレンチ・北トレンチを設けた。

①南トレンチ

南トレンチは、木炭窯によって切られた旧道の最上部に1×3mの規模で設置した。15～20cm程度の腐葉土による表土層を除去すると、地山に到達した。地山においても地表面で確認できた掘り込みが確認できた。表土層からは古く想定しても江戸時代後期以降の遺物が出土した。

②北トレンチ

北トレンチは、新旧通路にわたって1×8mの規模で設置した。南トレンチと同様の所見であった。遺物は出土しなかった。

③SX001 木炭窯跡

四王寺山山頂から派生する尾根の南斜面に掘り込まれて構築された木炭窯跡である。以下において、焚口・燃焼部 (点火室)・焼成部 (炭化室)・排煙部、前庭部の順に詳述する。

焚口・燃焼部 (点火室) 焼成部との境である最奥部は約0.8m、人頭大の石が四段にわたって積まれている。最終操業時は焼成部よりも0.2m弱高かった。これは、燃焼部の縦断割りによる土層観察から旧操業時の灰が堆積したためと考えられる。灰の堆積層と考えられる層が二層確認できることから少なくとも二回の操業が行われた窯であったと考えられる。

焼成部 (炭化室) と排煙部 2.2×2.8mの規模でやや長方形に近い形状の円を呈している。燃焼部との境は約0.8mで、その周囲に人頭大からそれ以下の大きさの石が高さ1.1m程度積まれている。底部は全

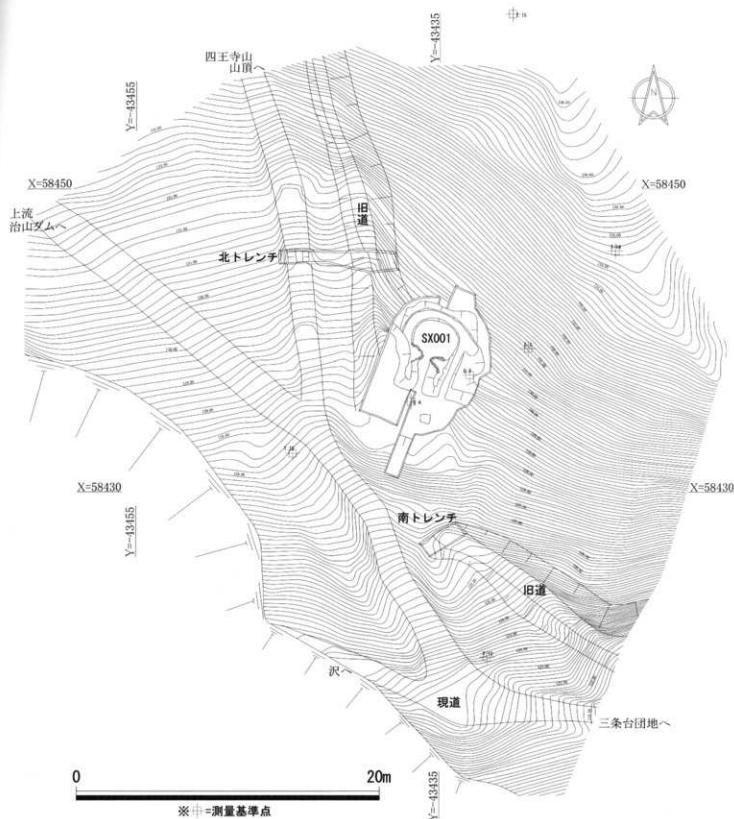
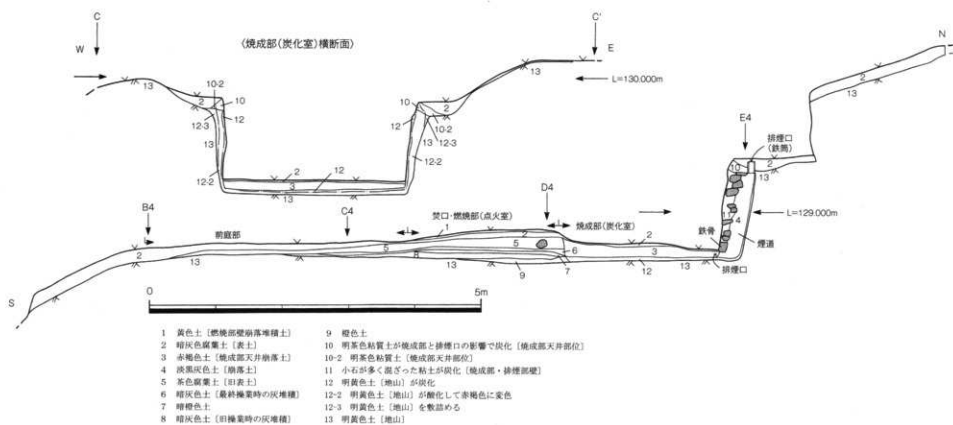
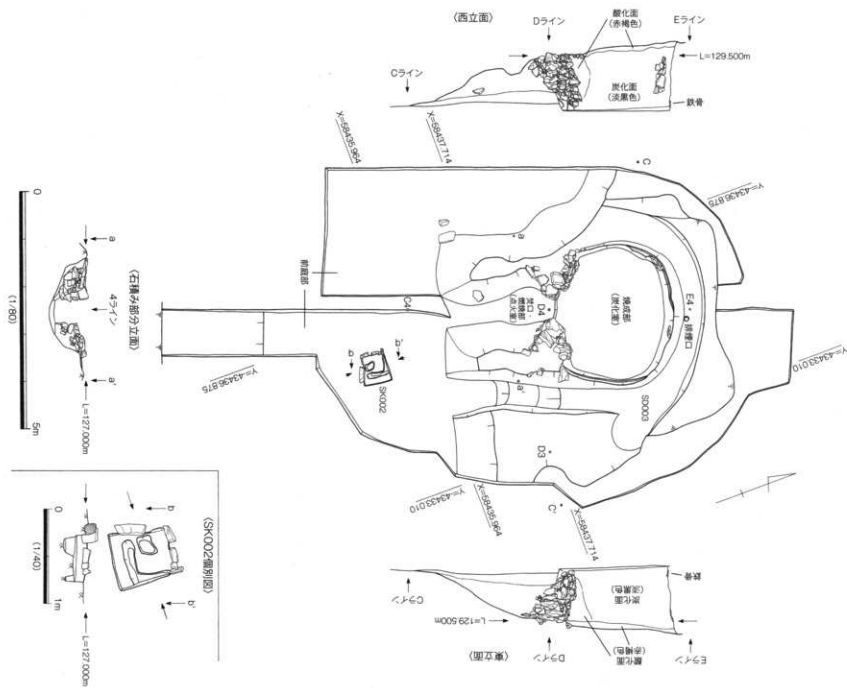


図4 調査地位置及び周辺地形測量図 (1/250)

図5 SK001 木炭窯跡集落跡地構図 [図6に対応]



- | | |
|--------------------|-----------------------------------|
| 1 黄色土 (焼後部壁崩落層土) | 9 褐色土 |
| 2 暗灰色炭質土 (表土) | 10 暗茶色粘質土が焼成部と排水口の影響で炭化 (焼成部天井部化) |
| 3 赤褐色土 (焼成部天井崩落土) | 10-2 明茶色粘質土 (焼成部天井部化) |
| 4 淡黒灰色土 (崩落土) | 11 小石が多く混ざった粘土が炭化 (焼成部・排水部壁) |
| 5 茶色炭質土 (田土) | 12 明黄色土 (地山) が炭化 |
| 6 暗灰色土 (最終採炭時の灰堆積) | 12-2 明黄色土 (地山) が炭化して赤褐色に変色 |
| 7 暗褐色土 | 12-3 明黄色土 (地山) を数箇める |
| 8 暗灰色土 (田土採炭時の灰堆積) | 13 明黄色土 (地山) |

図6 SK001 木炭窯跡土層図 [図5に対応]

面が淡黒色を呈しており炭化している。東西壁面は燃焼部との境から0.5m程度赤褐色を呈しており炭化している。そこから奥にかけては淡黒色を呈しており炭化している。最奥部の壁面は小石が張り付けられたように積まれており、焼成部最奥下部に開いている排煙部の煙道の壁面を構築する際に粘土に貼り付けながら積まれたものと考えられる。焼成部に開いた排煙口の上部を支えるのは0.15×0.15mの鉄骨である。排煙口の規模は高さ0.1m弱、幅0.2m弱の長方形を呈しており、焼成部底部よりやや掘り込まれた形で設置されていた。この規模で煙道がやや北側に傾いた角度で構築され、高さ1.2mのところ、直径約0.1m・高さ0.2mの大きさの鉄筒によって構成された排煙口に達する。排煙口を含めた焼成部の周りには深さ約0.15m・幅約0.7mで掘り込みがあり、焼成部に水が入れないようにするための排水溝と考えられる(SD003)。また、排水溝の窓体側掘り込み傾斜は約30°を測り、その角度でドーム型の屋根が焼成部を覆っていたと考えられる。屋根部材はおそらく木の枝などによって骨組みを作って藁などの繊維物を被せて粘土を貼ったものと考えられる。これは、焼成部の底部に堆積していた赤褐色の土の上に人頭大の大きさの同色の粘土の塊が複数確認できたことによる。この塊を観察すると繊維物の痕跡を一定の面にのみ確認することができる。

前庭部 約4×7mの規模で長方形を呈しており、南側は斜面になっている。先述の通り、旧道を切る形で展開している。SX001調査区の南東隅に大木があったために旧道との関係を探るための調査区を設定できなかった。しかし、南トレンチの北西側の地形の状態から旧道を切って前庭部が構築された可能性は極めて高い。なお、表土である暗灰色腐葉土から複数のスレートが、旧表土である茶色腐葉土直上から最近では目にするのができなくなった形状の鉄製の鉄製品などが出土した。また、燃焼部に向かって右手に0.7×0.7mの正方形を呈して、平均深さ0.15m、最深0.25mの石組み土坑を検出した(SX002)。埋土が前庭部全面を覆っていた表土である暗灰色腐葉土に酷似していたことと、焼成部の左手などには検出されなかったことを鑑みると、木炭窯が廃絶した後の構築物の可能性もある。なお、遺物は出土していない。

(3) 出土遺物(図7)、写真図版13-32)

SX001表土層出土遺物

須恵器

坏(1) 内外面ともに回転ナデ調整。色調は内外面ともに淡灰色を呈する。胎土は緻密で硬質。

土師器

皿a×坏a(2) 内面は回転ナデ、外面は回転ヘラ切りの後にナデ調整。色調は内外面ともに鈍い褐色を呈する。

南トレンチ出土遺物

国産陶器

土瓶(3) 欠損部分が多く、残存部分から復元的に作図。外面に透明な釉が薄く施されている。体部下半部は煤が付着している。色調は外面が白褐色、内面が淡茶灰色を呈する。胎土は緻密で硬質。

国産磁器

盃(4) 完成品。光沢度・透明度が高い釉が台高以外に施されている。素地は白色。胎土は緻密で硬質。



図7 原遺跡第20次調査 出土遺物実測図(1/3)

6. 総括

① SX001 木炭窯跡について

地表面においてある程度把握できていた木炭窯跡であるが、今回の発掘調査によって、細部に至るまで良好な形で残存していたことがわかった。

排煙部の鉄骨と鉄筒の部材は、木炭窯のある程度の年代観を与える材料と考えられる。当調査区の表土層出土の鉄製の鉄製品や木炭窯跡の地表面への露呈具合などを勘案すると戦後と考えるのが妥当と考えられる。

今回の調査時に周辺住民の方々への聞き取り調査を行わなかったために、埋蔵文化財調査成果からの想定外の域を出ないのは、調査担当者の落度であり反省するところである。また、木炭窯跡の検出事例は、各地で様々な時期の事例が蓄積されつつあり、比較検討を行うことも今後の課題といえる。

木炭窯は生活燃料などの木炭を生産する窯である。木炭は古くから我が国の生業に取り入れられており(樋口1993)、木炭生成の木炭窯を調査・研究・保存(記録保存も含む)して未来へ伝えることは我が国の生業の一端を未来に伝播することに繋がると思われる。

② 通路について

地表面観察による地形の把握と発掘調査成果は一致する結果であった。このことにより、当地域においては人が山に入るという行為によって作られた通路(山道)以外の大規模な人為的改変は、個人所有の土地内における耕作などによる施設成行為を除いては見られないことが確認できた³¹⁾。通路は新旧あることが確認でき、旧道の断絶と新道(現道)の利用には木炭窯設置が関わっている可能性が極めて高い。このことは、当地域における山の利用がある時期に変化したことを示唆しており、生業の一端を窺い知ることができる貴重な成果を得ることができたと思う。今後は、今回の調査区から四王寺山山頂に至るまでの通路の詳細把握とその周辺の人為造成の有無を確認することが文化財保護の一端として急務といえる。

【註】

1) ただし、近年に建設された本調査地の土流に所在する治山ダムおよびその建設作業用通路は存在する。これについては6頁の調査前状況の説明を参照されたい。

【引用文献】

- 財団法人太宰府市文化スポーツ振興財団 2002 『宅地開発と人口増加』『太宰府一人と自然の風景』
 太宰府市 1992 『太宰府市史 考古資料編』
 太宰府市 2004a 『太宰府市史 通史編Ⅱ』
 太宰府市 2004b 『太宰府市史 通史編Ⅲ』
 太宰府市 2005 『太宰府市史 通史編Ⅰ』
 太宰府市教育委員会 1981 『原遺跡の調査』『筑前国分寺跡・陣ノ尾遺跡』(太宰府市の文化財第4集)
 太宰府市教育委員会 1989 『調査方法』『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅰ』(太宰府市の文化財第14集)
 太宰府市教育委員会 2001a 『原遺跡Ⅰ—第8・11次調査—』(太宰府市の文化財第54集)
 太宰府市教育委員会 2001b 『太宰府市における埋蔵文化財調査指針(2001年9月改訂)』
 福岡県教育委員会 2008 『原遺跡18次』(福岡県文化財調査報告書第219集)
 樋口清之 1993 『木炭』法政大学出版会

表1 原遺跡第20次調査 検出遺構一覧

S-番号	遺構番号	種別	備考	埋土状況(古→新)	遺構間切合(古→新)	時期	地区番号
1	SX001	木炭窯				昭和中期	—
2	SK002	土坑	SX001 前底部内			昭和中期	SX001 内
3	SD003	溝	SX001 窯体周囲			昭和中期	SX001 内

表2 原遺跡第20次調査 出土遺物一覧

SX001 表土

須恵器	碗
土師器	皿 a × 坏 a
木製品	木炭
金属製品	鉄製品 (鉄・鋤簾・斧)

南トレンチ 表土

土師器	破片
国産陶器	土瓶
国産磁器	盃 (染付)

写真図版



1. SX001 調査前状況 (南から)



2. SX001 廃絶時 検出状況 (南から)



3. SX001 廃絶時 焚口・燃焼部 検出状況 (南から)



4. SX001 鹿絶時 窯体内 天井崩落状況 (西から)



5. SX001 鹿絶時 窯体内 天井崩落状況 (東から)



6. SX001 廃絶時 前庭部 検出状況（西から）



7. SX001 前庭部南斜面 検出状況（北から）



8. SX001 前庭部南斜面 検出状況（南から）



9. SK002 土層観察（北から）



10. SK002 完掘状況（北から）



11. SX001 最終作業時 検出状況 (北東から)



12. SX001 最終作業時 検出状況 (南から)



13. SX001 燃烧部 石積み状況 (南から)



14. SX001 焚口・燃烧部付近 石積み状況 (北から)



15. SX001 焚口・燃烧部対面 壁面状況 (南から)



16. SX001 上部斜面 土層観察 (南東から)



17. SX001 窯体東側 横断面土層観察 (南から)

(北西から)



18. SX001 窯体内 断ち割り状況 (北から)



19. SX001 窯体東壁 横断面土層観察 (南西から)



20. SX001 窯体西壁 横断面土層観察 (南東から)

21. SX001
排煙部
断ち割り状況
(南東から)



22. SX001
排煙部部材
鉄骨出土状況
(南上から)



23. SX001
排煙口近景
(北東から)





24. SX001 燃焼部 縦断断ち割り土層観察（南東から）



25. SX001 前庭部 縦断面土層観察（南東から）



26. 南トレンチ完掘状況（北から）



27. 北トレンチ完掘状況（西から）



28. 本堤左岸（本調査地）
着工範囲
伐採後状況
（南から）



29. 本堤右岸
着工範囲
伐採後状況
（北から）



30. 本堤右岸
工事状況
（北から）



31. SX001 天井部残骸

SX001表土層出土



南トレンチ出土



32. 原遺跡 第20次調査 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はらいせき 2										
書名	原遺跡 2										
副書名	治山ダム建設に伴う調査 (原遺跡第 20 次)										
シリーズ名	太宰府市の文化財										
シリーズ番号	109 集										
編纂者	下高 大輔										
編纂機関	太宰府市教育委員会										
所在地	福岡県太宰府市観世音寺 1 丁目 1 番 1 号										
発行年月日	2008 (平成 20) 年 12 月 8 日										
ふりがな	条坊	ふりがな	コード		座標 (国土産権第 II 系)		調査期間		調査面積	調査原因	
所収遺跡名	【嶺山補定案】	所在地	市町村	通称番号	X	Y	開始	終了	m ²		
はらいせき だい 20 じ		太宰府市大字 太宰府市大字 太宰府市首領									
原遺跡 第 20 次	条坊外	1462-1	402214	302-020	58440	-43435	20080722	20080813	72	治山ダム建設	
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項				
原遺跡 第 20 次	生産関連遺跡	近・現代	木炭窯・遺跡		土器・陶磁器・木製品(木炭)・金属製品						

太宰府市の文化財 第 109 集

原遺跡 2

— 治山ダム建設に伴う調査 (原遺跡第 20 次) —

平成 20 (2008) 年 12 月

編集・発行 太宰府市教育委員会
太宰府市観世音寺 1-1-1

印刷 有限会社 システム・レコ
福岡市東区土井 1-11-21